

親子ひろしま訪問団

中学生ながさき訪問団

平成29年度訪問の記録

広島：平成29年（2017年）8月5日～7日

長崎：平成29年（2017年）8月8日～10日



秦 野 市

～ 目 次 ～

は し が き	・・・・・・・・・・	P.1
I	親子ひろしま訪問団	
1	訪問の概要	・・・・・・・・・・ P.3
2	訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・ P.14
3	団員名簿	・・・・・・・・・・ P.22
4	訪問団規約	・・・・・・・・・・ P.23
II	中学生ながさき訪問団	
1	訪問の概要	・・・・・・・・・・ P.24
2	訪問団員（参加者）の声	・・・・・・・・・・ P.30
3	団員名簿	・・・・・・・・・・ P.34
III	はだの平和の日のつどい	・・・・・・・・・・ P.35
IV	資 料	
1	麩市民憲章、麩市平和都市宣言、平和の日制定文	・・・・・・・・・・ P.36
2	広島市平和宣言	・・・・・・・・・・ P.37
3	（広島）こども代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・ P.39
4	長崎平和宣言	・・・・・・・・・・ P.41
5	（長崎）被爆者代表「平和への誓い」	・・・・・・・・・・ P.43

◆訪問団の主なスケジュール

日 時	項 目	内 容
6月3日(土) 午後4時～	① 参加者説明会 ② 第1回研修会	① 日程等について ② 平和学習
7月21日(金) ① 午後1時半 ～午後3時15分 ② 午後3時半 ～午後4時	① 第2回研修会 ② 結団式 市長表敬訪問	「はだの平和の日のつどい」での 報告方法検討 市長メッセージ・千羽鶴の受け渡し 場所：秦野市役所本庁舎3階講堂
8月5日(土) ～ 8月7日(月)	広島訪問	① 広島平和記念資料館見学 ② 原爆の子の像への千羽鶴を捧げる ③ 平和記念式典参列 ④ 被爆体験聴講 ⑤ とうろう流し ⑥ 平和記念公園内碑めぐり ⑦ 宮島見学
8月8日(火) ～ 8月10日(木)	長崎訪問	① 長崎原爆資料館見学 (千羽鶴を捧げます) ② 青少年ピースフォーラム ③ 被爆体験聴講 ④ 原爆犠牲者慰霊平和祈念式典参列 ⑤ 平和公園フィールドワーク ⑥ 歴史学習施設見学
8月12日(土) 午後3時半 ～4時45分	はだの平和の日 のつどい	訪問の活動報告 場所：秦野市文化会館小ホール

は し が き

広島・長崎に原爆が投下され、多くの尊い命が奪われてから、70年を超える月日が経ちました。今でも原爆の後遺症や心の傷で苦しむ方がたくさんいる一方で、復興の努力の中、平和を訴えてきた戦争体験者は減少の一途をたどり、悲惨な記憶の風化が進行しつつあります。また、現代社会の中でも、いじめや虐待、殺人により尊い命が奪われるといった悲しい報道が毎日のように流れ、世界ではいまだ紛争が絶えず、私たちが希求する平和な社会と言える状況にはないように思われます。

戦後50年を契機に始まった「親子ひろしま訪問団」は、今年で23回目を迎えました。昨年までで、214名の親子が広島を訪問してきました。

また、長崎市で平和首長会議総会が開催される今年は、市内の公立中学校の生徒9名による「中学生ながさき訪問団」が初めて長崎市を訪問しました。

どちらの訪問団も、台風の上陸による影響が懸念されましたが、無事に行程を終えることができました。72年前のこの日、この二つの場所で、原爆が一瞬にして多くの人々の生活とその尊い命を奪ったことを思うと、言葉ありません。

戦争を起こしたのも人間、傷つき立ち上がって生きるのも人間。「人が人を傷つける」という出来事がたびたび報道されている昨今、両訪問団員の総勢19名にとって、平和記念資料館又は原爆資料館の見学、青少年ピースフォーラムへの参加、平和記念式典への参列、被爆体験談の聴講などの経験は、改めて平和であることや命の重みを考える大変良い機会となったと思います。

また、今年は、両訪問団がそれぞれの被爆地を訪問し、肌を通して学び、感じてきたことを広く市民へ継承していくため、8月12日に「はだの平和の日のつどい」を開催し、市長をはじめ、多くの観客が見守る中、両訪問団の活動報告及び「平和を考えるパネルディスカッション」も行いました。訪問団員の生の声が、会場の人々の心に届いたと思います。

本市では、核兵器廃絶・非核三原則の堅持、恒久平和を柱とした「平和都市宣言」を定め、また、広島・長崎両市が主導する「日本非核宣言自治体協議会」や「平和首長会議」に加盟し、平和への思いを発信しています。

平成20年6月には、市民一人ひとりが改めて平和の大切さや命の尊さを考える機会として、8月15日を「平和の日」と制定しました。毎年「平和の日」を絡めた日程で、市民が主体となった様々な平和事業を展開しています。

また、平成21年8月には、市役所に「平和の^{ともしび}灯 モニュメント」を市内事業所の協力を得て、自治体としては全国で14か所目、神奈川県内では初めて設置しました。このモニュメントの種火^{たねび}は、「親子ひろしま訪問団」が広島平和記念公園から採火^{さいか}し持ち帰った炎を、「平和のシンボル」としてともし続けています。

今年、訪問団が広島・長崎^{ながさき}両市に届けた千羽鶴^{とど せんばづる}はおよそ2万2千5百羽にもなりました。一羽一羽、平和への思いを胸に丁寧^{ていねい}に折っていただいた多くの市民の皆様^{みなさま}に、心からお礼を申し上げます。抱えきれないほどの千羽鶴^{せんばづる}の重さに、鶴を折られた皆様^{みなさま}の思いを感じながら、心を込めて鶴^{つる}を捧げました。

平和記念式典への参列や被爆^{ひばく}体験談^{ちようこう}の聴講^{ふく}などの貴重な経験を含め、被爆地^{ひばく}の広島で・長崎^{ながさき}で見聞きし学んだことを、団員一人ひとりが心に刻み込み^{きざ}、その思いを多くの人々に伝え、また次代へと語り継^ついでくれることを心より願います。

秦野市市民部市民活動支援課

I 親子ひろしま訪問団

1 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月5日(土)

8 : 0 8 小田原駅出発

1 1 : 4 1 広島着

1 4 : 0 0 広島平和記念公園見学

千羽鶴を「原爆の子の像」に捧げる

1 5 : 0 0 広島平和記念資料館見学



「原爆の子の像」の前で千羽鶴とともに

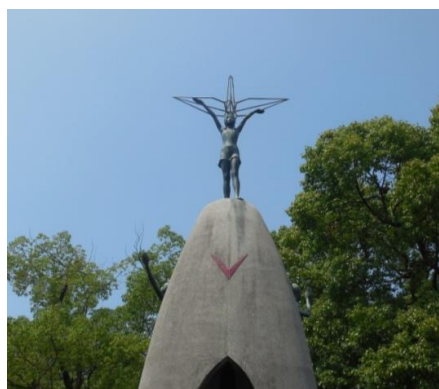
原爆の子の像

この像のモデル佐々木禎子氏は、2歳の時に爆心地から1.7kmの自宅で被爆した。足が速く、とても元気な子だったが、小学6年生の時に原爆症を発症した。入院中、鶴を千羽折れば病気が治ると言われ、信じて折り続けたが、中学校に入学できずに亡くなった。

「原爆の子の像」は禎子さんが通った小学校の同級生たちの呼び掛けにより、全国の学校や外国からの支援により建てられた。

原子力の研究でノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹博士は、この子どもたちの気持ちに感動し、博士の筆による「千羽鶴」、「地に空に平和」の文字が彫られた鐘を寄贈した。その鐘の下に金色の折り鶴がつるされ、風鈴式に音が出るようになっている。この鐘と金色の折り鶴は平成15年に複製されたもので、オリジナルは広島平和記念資料館に展示されている。

訪問団は、広島到着後、市民から託された千羽鶴を手に広島平和記念公園へ向かい、原爆の子の像に捧げた。平和記念公園には世界中から大勢の人々が集まり、原爆の子の像にもたくさんの千羽鶴が捧げられてされていた。



平和な未来への夢を託す少女の像



同年代の禎子さんを思い、鐘を鳴らす

平和記念公園

この地域は、元々は広島でも有数の繁華街だった。しかし、爆心地に近かったため、原爆投下により壊滅した。

その後、昭和29年（1954年）に平和を祈念し、建築家の丹下健三氏の手により公園として生まれ変わった。



式典の準備が行われる記念公園

園内には平和記念資料館をはじめ、原爆死没者慰霊碑、原爆の子の像、平和の灯、平和の鐘など多くの碑やモニュメントなどが設置されている。

毎年、原爆が投下された8月6日には「原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式（平和記念式典）」が開催され、夜には元安川をはじめ市内六つの川で犠牲者を慰霊する「とうろう流し」が行われている。

昨年5月27日には、バラク・オバマ前大統領がアメリカ合衆国大統領として初めて訪れ、原爆死没者慰霊碑の前で、核兵器なき世界の実現へ向けた思いをスピーチした。

平和記念資料館

平和記念資料館は、被爆の実相を伝え、核兵器のない平和な世界の実現に貢献するために開設された。本館と東館の二つの建物からなり、今年度は残念ながら本館は改修工事中のため見学することはできませんでしたが、リニューアルしたばかりの東館では、被爆者の遺品やタッチパネル等、最新技術を活用した資料を展示している。

また、核実験への抗議文を展示しており、その数は600通以上、人類最初の被爆地として、強く、地道に訴えを発し続けている。

昨年5月に資料館を訪れたオバマ前大統領は、東館1階ロビーで、同行した安倍晋三内閣総理大臣と共に核兵器廃絶に向けたメッセージを記した後、自らが折った鶴2羽を、子どもたちに手渡しました。

その折り鶴は、テレビで見るのとは違い、静かに、そして強く、訪問団員の心に戦争や原爆の悲惨さを訴えかけた。



タッチパネルを活用した資料

(2) 訪問2日目・8月6日(日)

- 8:00 原爆死没者慰霊式並びに
平和祈念式参列
- 10:00 被爆者体験談の聴講
- 13:30 平和記念公園内の碑めぐり
- 19:30 とうろう流し



それぞれの平和への思いを灯籠に込めた

原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式

毎年8月6日に、被爆者、政府・自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列し、原爆死没者の冥福と恒久の平和を願って行われる。

午前8時に開会し、松井一實広島市長と遺族代表が、原爆死没者名簿を原爆慰霊碑に納めた。

この1年間に新たに亡くなったり、死亡が確認されたりした被爆者は5,530名。名簿搭載者の総数は30万8,725名に、名簿の数は113冊となった。

原爆が投下された午前8時15分、全員で黙とうし、死没者への心からの哀悼と不戦の誓いを新たにした。

黙とう後、松井一實広島市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた「平和宣言」が発信された。広島市は、平成10年(1998年)から核兵器保有国の駐日大使の式典への参列を求める取組を開始し、今年は、80か国と欧州連合代表らが参列した。

松井市長は平和宣言で、核兵器を「絶対悪」と表現し、これを世界から消し去る道筋をつけるために、各国の為政者が「良心」に基づき、互いの相違点を認め合い、克服するための努力を「誠実」に行うことの重要性を訴えた。

訪問団は、初めて参列する式典の、テレビで見るとは異なる厳粛な雰囲気緊張しながら、参列する多くの被爆者及び遺族とともに黙とうを捧げた。子どもたちは、広島市長や安倍晋三内閣総理大臣の挨拶、同年代であることも代表の誓いの言葉に真剣な表情で耳を傾け、平和への思いとこの貴重な経験を、心に刻んだ。



挨拶をする安倍首相

げんばくしほつしゃいれい ひ 原爆死没者慰霊碑

平和記念公園の中央に位置する、古墳時代の家形埴輪に似たデザインの碑で、中央の石室には原爆死没者名簿が納められている。碑の正面には、「安らかに眠ってください 過ぎ ちは繰り返しませぬから」という言葉が刻み込まれている。

この静かで短い言葉には、原爆死没者への
あいとう 哀悼と、戦争という過ちを二度と繰り返さないという平和への願いと誓いが込められており、見る者の心を打つ。

げんばくいれい ひ いの 原爆慰霊碑、祈りの泉、嵐 ちか の中、の母子像、資料館、平和の灯は、一直線で結ばれるように設計されている。



直線上に原爆ドームが見える設計になっている

平和の灯

こんりゅう 建立は、昭和39年(1964年)8月1日。当時、東京大学の教授だったたんげけんぞう 丹下健三氏の設計により、全国12宗派から寄せられた「しゅうは 宗教の火」や「しゅうきょう 溶鉱炉」などの全国の工場地帯からとど 届けられた「産業の火」が、昭和20年(1945年)8月6日生まれの7名の女性により点火された。

建立の目的は「水を求めてやまなかった犠牲者を ぎせいしゃ 慰め、なぐさ 核兵器廃絶と世界恒久 かくへいきはいぜつ 平和を希求するため」。この火は、点火された日以来ずっと燃え続けており、「かくへいき 核兵器が すがた 地球から姿を消す日まで燃やし続けよう」というはんかく 反核のしょうちょう 象徴である。



本市にも分けられた平和の灯

本市では、平成21年8月6日に、平和のしょうちょう 象徴として、市役所本庁舎 ちょうしゃげんかん 玄関横に「平和の灯モニュメント」を設置したが、親子ひろしま訪問団がこの「平和の灯」から採火した火を持ち帰り、ともし続けている。

被爆体験談聴講

平和記念式典参列後、講師の増岡清七氏から被爆体験のお話を伺った。増岡氏は、被爆当時の状況やその時の恐怖について子どもたちにも分かるよう丁寧に話し、その言葉は、戦争そして原爆の恐ろしさ、平和の大切さを訪問団に静かにしかし強く訴えかけた。

【被爆体験談（増岡清七氏のお話から抜粋）】

昭和20年(1945年)8月6日は、建物疎開作業のため、約8,300名の中学生在が作業をしていた。学徒動員令により当時の中学生は、夏休みもなく工場等で作業や建物疎開に従事することになっていた。

建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぎ、住民の避難場所のために建物を壊し、空き地をつくることで、当時、県庁や市庁舎周辺は建物疎開で空き地となっていた。当日、増岡氏を含む3年生の半数の70名は、爆心地から約1kmの場所で、引率の先生の話聞いていた。

午前8時15分、突然、左からの風で押し上げられ、地面にたたきつけられた。そのまま意識を失い、原爆特有の「ピカ（光）ドン（音）・きのこ雲」の記憶はなかった。

意識が戻り、見回すと夜のように真っ暗な中、空から火が降って見え、悲惨な状況が広がっていた。原爆が落ちたと知ったのは後のことだった。

生き残った学友たちを見ると、みんな皮膚が垂れ下がり、一見誰だか分からないほどの形相だった。皮膚が熱で剥がれ、爪のところで止まり、垂れ下がっていた。

増岡氏も左顔面や腕など皮膚が垂れ下がっていた。何が起こったのか、どこが安全なのかも分からないまま、爆心地から市外へ必死で逃げた。炎に焼かれ、死に逝く人たちを見ながら、とにかく「死にたくない」一心で逃げた。「生きたい」ではなく「死にたくない」という気持ちで。「生きたい」には希望があるが、「死にたくない」は絶望の中で感じる。広島市の

増岡清七氏（広島市在住）



爆心地から約1kmで被爆。当時中学3年生。

戦後、高校で教鞭をとっていたが、退職後、「被爆語り部」として、反核・平和を訴え続けている。

現在、「広島県高等学校被爆教職員の会」会長。

街が^{ほのお}炎で燃え上がっている中「死にたくない」とたどり着いた防空壕^{ぼうくうごう}には、人が重なり合い、あふれていた。

ひん死の状態で、水や家族を求めている。
木陰^{こかげ}でそのまま眠^{ねむ}ってしまったところを翌日^{よくじつ}、
救助隊の馬車で市外の民家の座敷^{ざしき}に運ばれた。
既に多くの人が丸太のように横たわっていた。
この時、初めて汚^{きたな}い布^{かんばん}で患部^ふを拭いたが、
治療^{ちりょう}はされなかった。



増岡氏の話に、真剣にメモを取る団員たち

翌日^{よくじつ}、汚^{きたな}い茶碗^{ちやわん}でお粥^{かゆ}が1杯置かれたが、皮膚^{ひふ}のうみで左目と口が開かず、食べるのに困った。皮膚^{ひふ}が垂れ下がった左顔面や腕^{うで}に太陽の光が当たると、針^{はり}でチクチク刺されるような痛みが続いた。数日後、行方を必死^{さが}で探してくれた父親と再会し、荷車^{にぐるま}に乘せられ親戚宅^{しんせき}に行った。

その時は、増岡^{ますおか}氏の体を気遣^{きづか}って教えられなかったが、自宅は全壊^{じたく ぜんかい}、母親は即死^{そくし}していたと、後に父親から伝えられた。療養^{りょうよう}のための旅行で留守にして死を免^{まぬか}れた父親も翌年^{よくとし}、増岡^{ますおか}氏が15歳のときに亡くなった。恐らく、増岡^{ますおか}氏の行方を探^{さが}すために原爆投下直後の広島^{げんぱく}の街を歩いて回る中で、残留放射能^{ざんりゅうほうしやのう}を浴びてしまったためと思われる（入市被爆^{にゅうし ひぱく}）。火葬^{かそう}する設備がなく、自分自身でだびに付した。既に兄は特攻隊員^{とっこうたいいん}として沖縄^{おきなわ}で戦死しており、家族は姉と二人きりになってしまった。

学友たちも多くが原爆^{げんぱく}により亡くなったが、そのうちの一人の遺品^{いひん}が、平和記念資料館^{てんじ}に展示されている。

げんぱく 原爆ドーム

後に「原爆^{げんぱく}ドーム」と呼ばれるこの建物は、大正4年（1915年）に広島県^よの物産品の販売促進^{はんばいそくしん}を図る拠点^{きょてん}として建設され、建設当時は「広島県物産陳列館^{ぶつさんちんれつかん}」という名称^{めいしやう}だった。その後、「広島県産業奨励館^{さんぎやうしやうれいかん}」と改称^{かいしやう}されたが、県内の物産品の展示・販売^{てんじ}を行うほか、博物館、美術館としての役割^{はげ}も担っていた。

しかし、戦争が激^{はげ}しくなった昭和19年（1944年）3月、産業奨励館^{さんぎやうしやうれいかん}としての業務が廃止^{はいし}され、内務省中国・四国土木出張所や広島県地方材木・日本材木広島支社など統制会社^{とうせい}の事務所として使用されていた。

設計者はチェコの建築家ヤン・レツル氏で、構造は一部鉄骨を使用したレンガ造り、石材とモルタルで外装が施されていた。全体は3階建てで、正面中央部分に5階建ての階段室、その上に銅板の楕円形ドームが乗っていた。

爆心地から約200mの場所に位置し、原爆投下により爆風と熱線を浴びて大破し、天井から火を吹いて全焼した。爆風がほとんど垂直に働いたため、本館中心部は奇跡的に倒壊を逃れたものの、館内にいた全ての人々は即死している。



平和そして核兵器廃絶の象徴である原爆ドーム

鉄骨部分がむき出しの残骸と化し、いつからともなく「原爆ドーム」と呼ばれ、平成8年(1996年)に世界遺産へ登録された。

静かにたたずむ原爆ドームの姿は、平和記念資料館で原爆に関する様々な資料を見た訪問団に、同じような悲劇を繰り返してはいけないと改めて強く感じさせた。

平和記念公園内の碑めぐり

平和記念公園及びその周辺には、原爆犠牲者の慰霊碑など50を超える原爆関連の記念碑や記念建造物がある。訪問団はボランティアガイドの案内を受けながら平和記念公園内の碑めぐりを行った。

被爆したアオギリ

爆心地から約1.5キロ離れた東白島町にあった当時の広島通信局の中庭に、3本のアオギリの木が植えられていた。

原爆の投下によって、熱線と爆風をともに受けた3本のアオギリは、枝葉が全て無くなり、爆心地側の幹の半分が焼け焦げた。

しかし、枯れ木同然だったアオギリは翌年の春、奇跡的に新芽を出し、その姿は、原爆投下と敗戦によって疲弊した人々の心に、生きる勇気と希望を与えた。



アオギリの歌を聞く団員



その姿で原爆の被害を訴え続けるアオギリ

昭和48年（1973年）、当時の中国郵政局（かつての
通信局）の建替えに伴い、平和記念公園内の現在の場所に
移植された。3本のうち1本は枯れてしまったが、この被爆し
たアオギリの種子は国内外に贈られ、「被爆アオギリ2世」
として大切に育てられている。

とうげさんきち し ひ 峠三吉詩碑

峠三吉氏は、爆心地から約3キロ離れた自宅で被爆した。その体験を文学の活
動を通して発表し、原爆反対、平和擁護の作品を数多く残した。その代表作である
「原爆詩集」は、世界的な反響を与えた。

平和記念公園内の碑文には、次のような詩が刻まれている。

「ちちをかえせ ははをかえせ
としよりをかえせ こどもをかえせ
わたしをかえせ
わたしにつながるにんげんをかえせ
にんげんの にんげんのよの
あるかぎり
くずれぬへいわを へいわをかえせ

峠 三吉 」



峠三吉詩碑にもたくさんの千羽鶴が捧げられている

島病院

昭和8年（1933年）に開業。原爆投下により壊滅したが、昭和23年
（1948年）に同所に再建された。

広島市への原爆投下における爆心地として、各時代の資料に「島病院」「島外科」
と記載されるが、これらは全て現在の島外科内科に当たる。

昭和20年（1945年）8月6日に原爆リトルボーイが投下された際、病院の上
空でさく裂したことが調査により判明したため、同所が爆心地とされている。

げんばくくようとう 原爆供養塔

ばくしんち 爆心地に近いこの付近には、ひばく 被爆後、
いたい さんらん 遺体が散乱し、また、川から引き上げら
れたものなど、無数の遺体が運ばれ、だ
びに付された。

昭和21年（1946年）、市民から
の寄付により、仮供養塔、仮納骨堂、礼
拝堂が建立され、その後、昭和30年

（1955年）に、広島市が中心となり
ろうきゅうか のうこつどう 老朽化した納骨堂を改築し、各所に散在していた引き取り手のない遺骨もここに
集め納めた。身内の見つからない遺骨や氏名の判明しない遺骨約7万柱が納められ
ている。

毎年8月6日には、様々な宗教・宗派合同の供養慰霊祭が営まれている。



犠牲となられた方々の供養塔

かんこくじんげんばくぎせいしゃいれいひ 韓国人原爆犠牲者慰霊碑

終戦時、日本には約300万人の朝鮮人（ちょうせんじん）がおり、数万人が広島市内で被爆（ひばく）したと
いわれている。

「死者の霊（れい）は亀（かめ）の背（せ）に乗（の）って昇（しょう）天（てん）する」という故事（こし）にならって、亀（かめ）を形（かたち）どった
台座（だいざ）の上に碑柱（ひちゅう）が建ち、その上に二つの竜（りゅう）を刻（き）んだ冠（かんむり）が乗（の）せられている。



多くの花が手向けられた慰霊碑

碑（ひ）は、当初（ひ）、軍人（ちゅう）であった朝鮮王家（ちょうせん）の一族（いちぞく）李殿（り）下（げん）が司令
部（しゅつしんとちゅう）への出勤（しゅつぎん）途中（ちゅう）に原爆（げんばく）投下（あ）に遭（あ）い、その後（そののち）発見（はっけん）された場所（ばしょ）
付近（ひん）ということから、本川橋（ほんかわばし）西詰（にしづめ）に建立（けんりつ）された。

その後（そののち）、各方面（かっぺん）からの強い要望（きょうぼう）により、平成11年（1999年）7月に平和記念公園（へいわきねんこう）内に移設（いせつ）された。慰霊碑（いれいひ）の
石（いし）は、国（くに）に帰（かえ）れなかつた人々（ひと）への思（おも）いから、ふるさと韓国（かんこく）の
石（いし）が使（つか）われている。

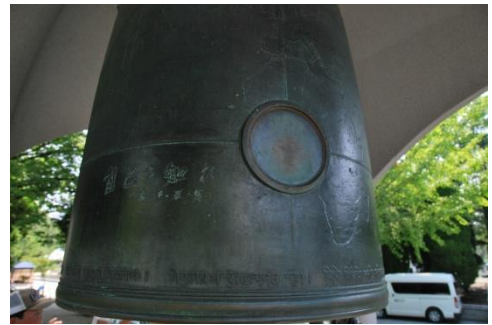
平和の鐘

核兵器と戦争の無い平和な世界の達成を目指し、その精神文化運動のシンボルとして建立された。この鐘の音を広島から世界の隅々まで響き渡らせ、全人類の一人ひとりの心にしみわたらせることを願い、訪問者が自由に鐘を鳴らせるようになっている。

鐘は、梵鐘の分野で重要無形文化財保持者（人間国宝）である香取正彦氏が制作し、表面には「世界は一つ」を象徴する国境の無い世界地図が浮き彫りにされている。

撞座は、原水爆禁止の思いを込めて原子力のマークがデザインされており、鐘楼の周囲の池には大賀ハスが植えられている。

被爆当時、ハスの葉で傷を覆い、やけどの痛みをしのいだという被爆者の霊を慰めたものである。



平和の鐘

とうろう流し

原爆は一瞬にして多くの命を奪った。そして、即死を免れてもひどいやけどを負った人たちが大勢いた。その人たちの多くは、その熱さと痛みに耐えかねて近くの川に次々に身を投げ、川面には遺体が浮き、川底にも遺体が沈んでいたという。

戦後、駅前を中心にヤミ市がにぎわい、中心部にバラック建ての商店が建ち始めた昭和23～4年頃、親族や知人を原爆で失った遺族や市民たちが追善と供養のため、手作りの灯籠を川に流したのが、「とうろう流し」の始まりと言われている。

灯籠には、亡くなった方の名前と流した人の名前を書き込むのが一般的だが、最近では「平和への思い」が書かれる光景も目立つ。長い歴史を持つ「とうろう流し」は、慰霊とピースメッセージの両方の意味を持つようになった。毎年8月6日の夕刻から元安橋の上流から流される。

広島訪問2日目を終えた訪問団10名は、平和施設見学や平和記念式典出席を経て感じたそれぞれの平和への思いを込めて、灯籠を流した。



元安川を彩る灯籠

(3) 訪問3日目・8月7日(月)

10:00 広島駅発
 11:30 世界遺産「^{いつくしまじんじゃ}厳島神社」見学
 16:57 広島駅発
 20:35 小田原駅着・解散



世界遺産・宮島「厳島神社」を見学



2 訪問団員（参加者）の声

(1) 訪問前の感想

ア 親の声

●私も息子も、平和な時代に生まれ育ち、穏やかな生活を送っている現状ですが、過去には悲惨な戦争があり、多くの尊い命が奪われた事実がありました。戦後の人々が同じ過ちを二度と起こしてはならないと誓い、守ってきたから今の日本があるのではないかと思います。

私は、戦争、原爆にとっても強い恐怖心があり、なるべく目を背けていましたが、戦後70年あまりが過ぎ、語り部の方々のお話を伺える機会が減り、悲惨な戦争の記憶の風化が進んでいると思いました。今回の親子ひろしま訪問団で、戦争、原爆、平和について、親子でしっかり勉強したいと思い、参加を希望しました。

●広島を訪れたことがなく、原爆ドームも自分の目で見たことはありません。東日本大震災の時は、まるで映画の一場面の、想像すらできないような映像を沢山見ました。けれど、どこか遠くで起きたことという感覚が正直ありました。数年後、被災地を訪れる機会がありました。映像で何度も目にしていた大川小学校を訪れた時の衝撃は今でも忘れられません。その時、現地へ行き、自分自身の目や耳、そして肌で感じなければならぬことが、沢山あることを痛感しました。なので、娘と行くタイミングはいつが良いのかと考えていましたが、中学校へ入学し、勉強、部活動に励む娘の姿から、今が良いのではないかと思います、応募しました。色々な意味で生きづらくなっている今、当時は生きたくても生きることができなかった多くの方々の犠牲の上に今の私たちの生活があることを忘れないためにも、自分の目や耳、そして肌で感じ、娘とともに学びたいと思います。

●私が訪問団に参加しようと思ったきっかけは、息子が訪問団におうぼに応募したいと希望したからです。これまでは漠然と「日本人なら一度はおとず訪れて、現実を知って受け止め、戦争はひさん悲慘だというメッセージを伝えなければならない」と考えていましたが、なかなか実行に移すことができませんでした。学校の授業や本で読むなど、学ぶ機会はありませんでしたが、私の中では「こわい」というイメージが大きく、一歩をふみ出すことができなかったように思います。訪問団として参加できることに感謝し、実際に広島へ行って、見て聞いてはだで感じ、平和について考え、二度と起こしてはならないことを発信できたらと思っています。そして、平和のとうと尊さを息子と共有し、親子のきずな絆を強められる3日間にしたいです。

●私は高校生の時に平和記念式典に参列して、ひばくしゃ被爆者のお話を直接聞くことができました。教科書で学んでいるだけでは本当のひさん悲慘さは分かりません。子どもにも実際に目で見て感じ、学びとってほしいと思いました。

昨年、5年生だった長女とおうぼ応募しましたが、ちゅうせん抽選で行くことができませんでした。今年は6年生になり、はんこうき反抗期と思春期にとつにゅう突入してしまい、4年生の時におうぼ応募しておけば良かったとこうかい後悔しました。

今年、まだまだ素直な4年生の次女と参加です。実り多い旅になるよう親子できちんと学習して出発したいと思います。

●現在の日本は世界的に見て平和な国ですが、国外に目を向けると、ニュース等では、テロやふんそう紛争、ミサイルはっしや発射の話題が多く見られます。息子がテロやミサイルはっしや発射のニュースに関心を持ち、どうしてテロやミサイルはっしや発射のようなことが起こるのかについて会話をするようになりました。戦争のひさん悲慘さや実態を息子にどう伝えていいかなや悩んでおりました。

そんな折に、親子ひろしま訪問団を知り、戦争やげんぱく原爆について二人で話し合いをし、命の大切さや平和のとうと尊さについて考えたいと感じ、参加を希望しました。

イ 子どもの声

- 僕が親子ひろしま訪問団に参加しようと思った理由は、戦争はもう二度と起こしてはいけないと思っているからです。

最初に原爆^{げんばく}のことを知ったのは、小学校高学年の授業の時でした。その頃は、恐^{こわ}くて目をそらしていましたが、戦争をしてはいけないと思い望むなら、目をそらさずに知っておくべきだと思い、学校以外でもテレビで取り上げられていたら見たり、世界の戦争のことも知っておこうとしました。また、中学校でも勉強をし、本や教科書で知れることは知りました。今回の訪問でしか学べないことをしっかり学びたいと思いました。

- 私は、学校で原爆^{げんばく}の被害にあった中学生たちのことを書いた碑^ひを学びました。この話^のに載っている写真がとても衝撃^{しょうげき}的で、改めて原爆^{げんばく}の恐ろしさが伝わってきました。そして、溶^とけた一升瓶^{いっしょうびん}、三輪車、ぼろぼろになった制服など、写真では「こんなことになってしまったのだな」と、それだけで終わってしまいましたが、直に見たら、写真やテレビ、文章などでは伝わらない原爆^{げんばく}の恐ろしさが身体全体で感じ取れるのではないかと感じました。さらに、救護所にされていた袋町^{ふくろまち}小学校へも行ってみたいと思いました。もし、可能であるならば、人間^{きず}を傷つける核爆弾^{かくばくだん}を世界からすべて消して、70年以上前にあった悲惨^{ひさん}なことが起きないように、私たちが語り^{かた}つ継ぎます。あのようなことを、二度と絶対に起こしてはいけないと思います。

- 僕がなぜ広島に行きたいと思ったかという、二つ理由があります。

一つ目は、原爆^{げんばく}ドームの形がどのようなものか見たいからです。また、世界遺産^{いさん}をどのくらい多くの人が見に来ているか知りたいからです。

二つ目は、平和記念資料館に行って、色々な資料を見れば、その当時の様子や風景を知って、学ぶことができると思うからです。戦争の中の日本の様子を知り、戦争のことをもっと知りたいと思います。

僕は、実際に原爆^{げんばく}を体験した方に、その当時の生活について聞いてみたいと思います。この訪問団での目標は、話をよく聞いて、よく学んで、戦争が悲惨^{ひさん}なことをみんなに知ってもらえるよう、報告会で発表できるようになることです。

●私は、広島に行って、戦争の色々なことを学んで、原爆^{げんぱく}ドームの見学などで、戦争の苦しさや恐^{こわ}さを知り、勉強したいと思います。

毎年テレビで平和記念式典を見ているけれど、実際に広島に行ってみて、色々な話を聞き、色々なものを見て学びたいです。戦争はとても恐^{こわ}いけれど、戦争のことや平和について学ぶのがとても楽しみです。

●最近のニュースなどでは、テロ、ミサイル発射^{はっしゃ}についてのニュースを沢^{たくさん}山見ます。そこで、僕は日本がどうなるのかが気になったので、お父さんに話したら、親子ひろしま訪問団^{おうぼ}に応募してくれました。

広島に原爆^{げんぱく}が落ちて、まき込まれた人^こに話を聞きたいと思い、参加しました。親子ひろしま訪問団から帰ってきたら、友達に伝えて、これからの平和について話し合いたいと思います。



副市長表敬訪問(結団式)にて、宮村副市長、みどりこども園の皆さんと記念撮影

(2) 訪問後の感想

ア 保護者の声

- 中学3年生という、多感な時期であり、反抗期、高校受験を控えており、心に余裕はないでしょう。そんな息子とのこの「親子ひろしま訪問団」に参加させていただき、原爆や戦争、平和について学び、語り合えたことや、日常ではなかなかない3日間すべて行動を共にする経験ができて、とても良かったです。今の平穏な世の中があるのも、戦後の日本人が同じ苦しみを起こさないと、平和を誓い守り続けてきたからであり、今を生きる私たちがこの気持ちを継承していくと誓いました。

現地の高校生のグループが平和記念公園にいた私たちに、公園内の碑を巡った感想をインタビューしました。彼女たちの姿を見て思ったことは、広島で生まれ育った子どもたちは、原爆や平和に対する想いが人一番強いように感じました。

今回の訪問で、改めて命の大切さを知り、平和への思いが強くなりました。私のできる範囲で、広島、原爆、平和について、周りに伝えていきたいと思います。今後、もう一度広島に行き、平和記念公園の碑や資料館を見学したいと思います。

- 原爆ドームを見たとき、広島での悲劇が、現実だったことを思い知らされました。原爆投下から26, 300日程しか経過していないことで、世界の人々がもっともっと広島を訪れるべきだと思いました。勿論、日本人もです。それぞれが広島で起きたことを我が身に置き換えて考えることができれば、二度と同じような悲劇を繰り返すことはないのではないかと考えます。戦争は人間の仕業です。戦争は人間の生命を奪います。戦争は死そのものです。過去を振り返ることは、将来に対する責任を担うことです。ヒロシマを考えることは、核戦争を拒否することです。ヒロシマを考えることは、平和に対しての責任を取ることです。ローマ法王、ヨハネパウロ2世の言葉を、世界の人々がほんの少し意識することで、今よりは少し違った状況を生み出すのではないのでしょうか。子どもたちの明るい未来のために、大人としてできることをしていきたいです。

- 出発前は、とにかく「怖い」イメージが大きく、平和記念資料館に入って、見ることができかどうかとても心配でした。

実際に広島に降り立った時の印象は、想像以上の暑さと「都会だな」という思い

で、「^{こわ}恐い」というイメージは^{ふっしょく}払拭されました。また、戦争の^{つめあと}爪跡を全く感じないほどの^{ふっこう}復興を遂げた街を見て、人間の力強さを感じました。同時に、戦争を過去のものにしてはいけないこと、^{かた}語り^つ継いでいくことで、先人の思いを後世に伝え、平和を守り続けていくことの大切さを改めて感じました。この3日間で見たこと、聞いたこと、^{はだ}肌で感じたことを報告し、二度と過ちを^く繰り返さないための一歩につなげられるよう、平和を考えられるきっかけになることを願っています。

- やはり8月6日に広島を訪問することはとても意味のあることだと実感しました。我が家は2歳違いの三姉妹で、次女と1対1でこんなに長い時間向き合う機会がなかったのですが、今回の「親子ひろしま訪問団」を通し、戦争や^{かくへい}核兵器、平和について学びつつ、^{じゅうじつ}充実した3日間を過ごすことができました。

高校生の時に参列した平和記念式典では、席もなく暑かった^{きおく}記憶ばかりでしたが、今回は屋根付きの席に^{すわ}座り「平和への誓い」やあいさつをじっくりと聞くことができました。長女と同じ6年生の「平和への^{ちか}誓い」に感動しました。広島の小学生の平和に対する意識の高さを感じ、私も母として、しっかり学び、子どもたちに伝えていかなければと思いました。「未来の人に戦争の体験は不要です。しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です」という言葉はもつともだと思います。

^{ひめぐ}碑巡りのガイドさんの「8月6日午前8時15分は^{ぐうぜん}偶然ではないのです。^{かく}核は、よく晴れていて、人々が屋外に^{たくさん}沢山いる時間でないと、最大限の効果、大勢の人を殺せないのです。だから、8月6日午前8時15分だったのです」という言葉が印象に残りました。人間は本当に^{こわ}怖いのです。

- 息子に^{げんぱく}原爆や戦争、平和について考えさせるいい機会だと思い参加しましたが、自分自身もすごくいい勉強になり、いい機会となりました。

今後も平和について考えることや、人助けになるようなことや助け合いを積極的に行っていきたいと思います。訪問全体を通しては、初日の移動の時は^{みな}皆よそよそしくあまり話ができませんでしたが、一緒に^{いっしょ}行動を重ねていくことで楽しい時を過ごすことができました。特に3日目の宮島は、台風の^{えいきょう}影響があり、宮島に行けない可能性もありましたが、事務局が天気、フェリーを調べ、^{へんこう}時間変更をしれて行くことができました。楽しい思い出をありがとうございました。

イ 子どもの声

- 広島を訪問して、平和記念資料館^{てんじぶつ}の展示物を見学し、当時の広島^{ひさん}の悲惨さが分かり、今度は長崎^{ながさき}へも^{おとず}訪れてみたいと思いました。

- 私が特に印象に残っているのが、平和記念式典と原爆^{げんばく}ドーム、被爆^{ひばく}体験者の増岡清^{ますおかせい}七^{しち}さんのお話です。初めて原爆^{げんばく}ドームを見た時、それまでとは違う^{ちが}空気になりました。私は「現実だったのだ」と改めて実感しました。

平和記念式典では、世界各国の代表の人たちや内閣総理大臣など多くの方が献花をしていました。こんなに多くの世界の人々が注目しているのに、なぜこの世界から核兵器^{かくへいき}はなくならないのでしょうか。

最後に、この訪問で一番^{しょうげき}衝撃^{しょうげき}だったのが、被爆^{ひばく}体験者の増岡^{ますおか}さんの話です。増岡^{ますおか}さんが爆風^{ばくふう}によって吹き飛ば^{ふと}されて意識を失った後、目の前に黒く焦^こげた人々が倒^{たお}れていて、「もうおれは死ぬ」と思ったそうです。

私は日本全国にこう問いかけたいと思います。「みなさんは被爆^{ひばく}地^ちを^{おとず}訪れたことがありますか」と。

- 今回、訪問団に参加したのは、平和記念資料館^{げんばく}で原爆^{げんばく}について知り、活動報告をして、その恐ろしさを沢山の^{おそ}人^{たくさん}に知ってもらいたいと思ったからです。平和記念資料館で一番印象に残っているのは、溶けたガラスの瓶^{びん}です。熱線によってとても固い瓶^{びん}が溶けてしまったことに^{おどろ}驚^{おどろ}き、^{こわ}恐^{こわ}さを感じました。

増岡^{ますおか}さんから被爆^{ひばく}体験談を聞き、皮膚^{ひふ}が垂れ下がっていたことを聞くと、ものすごく^{おそ}恐ろしかったです。

今回の訪問で、戦争^{ひさん}の悲惨さを感じました。多くの人が広島に行って平和を考え、広島^{ひさん}のいいところを伝えてほしいと思いました。

●お母さんと一緒に戦争の^{こわ}恐さや^{おそ}苦しき、核兵器の^{かくへいき}恐ろしさを学び、知ることができて良かったです。広島で見てきたことを、知らない人にも伝えて、戦争が二度と起こらないようにしたいです。

広島のお好み焼きやあなごはとても美味しかったです。台風で宮島には行けないと思ったけど、行けたので^{うれ}嬉しかったです。大鳥居のそばまで歩いて行って貝を^{ひろ}拾ったり、カニを見つけてりして楽しかったです。夏の思い出になりました。

●僕としては、2泊3日は短かったけれど、ものすごく楽しかったです。

特にとろう流しが一番楽しかったです。願い事を書いて、中に木を入れて火をつけ、川に流したのが楽しかったです。

今後、学校の友達に広島で学んだことを伝えていきたいと思います。

3 団員名簿

保護者 氏名	子ども 氏名	役 割
いしい さとる 石井 悟	いしい こうよう 石井 孝陽 南中3年	団 長
まるやま けいこ 丸山 圭子	まるやま なのは 丸山 なのは 本町中1年	副団長
いわもと きよ 岩本 貴世	いわもと こうた 岩本 昊汰 西小5年	記 録
もり りか 森 利佳	もり りほ 森 莉穂 大根小4年	会 計
しながわ しんいちろう 品川 晋一郎	しながわ るい 品川 瀧勇 南小5年	監 事

4 訪問団規約

(名 称)

第1条 この訪問団の名称は、親子ひろしま訪問団（以下「訪問団」という。）という。

(目 的)

第2条 訪問団は、原爆被災地である広島を訪問し、団員自らがその目で戦争の悲惨さを見ることにより、平和の尊さを学ぶことを目的とする。

(事 業)

第3条 訪問団は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 原爆ドーム等を視察することにより、原子爆弾を始めとした戦争兵器使用による殺りくの悲惨さを学ぶ。
- (2) 平和祈念式典に参加することにより、無意味な戦争の否定を決意するとともに、恒久の平和の追求を決意する。
- (3) 原子爆弾が投下され、壊滅的な被害を被りながらも希望を持って築きあげられた今日の広島市等を視察することにより、平和の尊さ及び不屈の努力の成果を学ぶ。
- (4) その他目的を達成するために必要な事業。

(組 織)

第4条 訪問団は、公募等の方法による希望者から選ばれ構成される親子5組10人により組織する。

- 2 訪問団に、団長、副団長、記録、会計及び監事を置き、それぞれ訪問団員の互選により定めるものとする。
- 3 団長は、訪問団の事業を総理し、訪問団を代表するものとする。
- 4 副団長は、団長を補佐し、団長に事故あるとき又は欠けたときは、その職務を代行するものとする。
- 5 記録は、訪問団の事業を記録するものとする。
- 6 会計は、訪問団の経理を処理するものとする。
- 7 監事は、会計を監査するものとする。
- 8 訪問団の事務局は、秦野市役所平和主管課に置く。

(解 散)

第5条 訪問団は、第2条の目的を達成したときに解散するものとする。

(経 費)

第6条 訪問団の経費は、訪問団員の自己負担金、市からの補助金、その他の収入をもって充てる。

(その他)

第7条 この規約に定めるもののほか、訪問団の運営に関して必要な事項は、団長が定めるものとする。

附 則

この規約は、平成7年6月15日から施行する。

この規約は、平成28年4月1日から施行する。

この規約は、平成29年4月1日から施行する。

Ⅱ 中学生ながさき訪問団

1 訪問の概要

(1) 訪問1日目・8月8日(火)

- 5 : 3 0 秦野市役所出発
- 8 : 1 5 羽田空港出発
- 1 0 : 0 5 長崎空港出発
- 1 1 : 5 0 長崎原爆資料館見学、千羽鶴を捧げる
- 1 4 : 0 0 青少年ピースフォーラム開会行事
- 1 5 : 1 0 平和学習フィールドワーク
- 1 8 : 0 0 青少年ピースフォーラム交流会



「原爆資料館」前で千羽鶴とともに

青少年ピースフォーラム

8月9日の平和祈念式典に併せて、全国の自治体が派遣する平和使節団の青少年と長崎の青少年とが一緒に被爆の実相や尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として、長崎市の主催により平成5年から毎年開催されています。

フォーラムの開催に当たっては、長崎市の高校生及び大学生によるピースボランティアが中心となり、企画から運営まで行います。

25回目を迎えた平成29年度は、全国から37団体、404名が参加し、参加者数は累計で8,500名を超えました。

【14:00～】開会行事（平和会館ホール）

- ①開会宣言
- ②挨拶
- ③被爆体験講話

【被爆体験講話講師】深堀 讓 治 氏



平成20(1945)年8月9日、原爆が投下されたとき母と中学1年、小学5年の弟2人、それに5歳の妹の4人が、爆心地から約600mのところで被爆し亡くなりました。

国の指導者の一方的なリードで一般国民は大切なことを知らされないまま、戦争に参加し敗戦へと導かれ、大きな犠牲を強いられました。国民は、常に国が暴走しないように、監視を続ける努力が必要が必要です。

(公財)長崎平和推進協会ホームページより

【15:20～】^{ひばく}被爆建造物等フィールドワーク（平和公園コース）

^{げんばく}原爆落下中心地碑

昭和20年（1945年）8月9日11時2分。アメリカのB29^{ばくげきき}爆撃機から投下された^{げんばく}原爆は松山町171番地の上空500mでさく裂しました。終戦直後、その地に^{げんばく}原爆災害調査団が標柱（アスベスト柱）を建立し、その後矢印型、木製、蛇紋岩の三角柱と姿を変え、現在では落下中心地標柱として昭和43年（1968年）に建立された^{くろみかげいし}黒御影石の碑が立てられています。



歴史を伝え続ける中心地碑

^{うらがみてんしゅどういへき}浦上天主堂遺壁

^{ばくしんち}爆心地から北東へ約500mの小高い丘にあった浦上天主堂は、明治28年（1895年）から建築に着手し、信徒たちの^{けんきん}献金と^{ほうし}労働奉仕により、大正3年（1914年）年に^{けんどうしき}献堂式を挙げるにいたりしました。大正14年（1925年）に正面の^{そうとう}双塔が完成し、大小の鐘が吊されました。

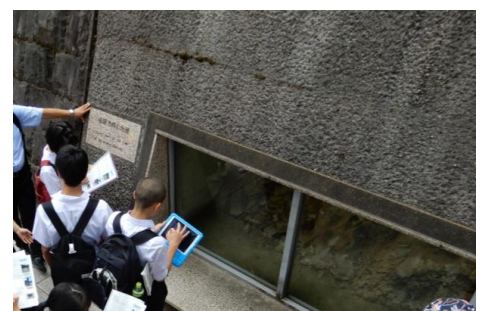
東洋一の壮大さを誇った天主堂でしたが、昭和20年（1945年）8月9日、午前11時2分、^{げんばく}原爆のさく裂により破壊され、わずかにまわりの壁を残すのみとなつてしまいました。この側壁は^{そくへき}聖堂の^{せいどう}南側の一部で、昭和33年（1958年）に新しい天主堂建設のためこの地に移築されたものであり、壁上の石像はザベリオと使徒です。しかし、風雨にさらされて^{いた}傷みが進んだため、安全性を^{こうりよ}考慮して現在の形状のまま内部及び表面の^{およ}補強を行いました。



当時の惨劇を物語る

^{ひばく}被爆当時の地層

^{げんばく}原爆落下中心地に当たるこの地層には、^{ちそう}原爆によって破壊された家屋の^{かわら}瓦やレンガ、熱によって焼けた土や溶けたガラスなどが現在でも大量に埋没しており、^{ひばく}被爆当時の悲惨な^{ひさん}状況を^{じょうきよう}示す被爆資料として、現地に^{ひばく}保存、^{ほぞん}展示されています。



参加者も地層に刻まれた過去を目に焼き付ける

いずみ 平和の泉

原爆のため体内まで焼けただれた被爆者たちは「水を、水を」とうめき叫びながら死んでいきました。その痛ましい霊に水を捧げて、冥福を祈り、世界恒久平和と核兵器廃絶の願いを込めて浄財を募り建設された円形の泉で、平和公園の一角、平和祈念像の前方にあります。直径18メートルで昭和44年に完成しました。

平和の鳩と鶴の羽根を象徴した噴水が舞い、正面には、被爆し、水を求めてさまよった少女の手記「のどが乾いてたまりませんでした 水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました どうしても水が欲しくて とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」が刻まれています。

「のどが乾いてたまりませんでした
水にはあぶらのようなものが
一面に浮いていました
どうしても水が欲しくて
とうとうあぶらの浮いたまま飲みました
—あの日のある少女の手記から—



水を求める当時の人の苦しさを伝える

きねん 平和祈念像

昭和30年（1955年）8月8日に建てられました。青銅製の像で高さ9.8m、台座3.8m、重量約22トン。北村西望氏による作品です。

この像は神の愛と仏の慈悲を象徴し、原爆犠牲者の鎮魂と永遠の平和を願い、天を指す右手は「原爆の脅威（長崎の過去）」を、水平にのばした左手は「平和（長崎の未来）」を示し、軽く閉じた瞼は戦争犠牲者の冥福を祈っています。

毎年8月9日、「長崎原爆犠牲者追悼平和祈念式典」がここで催され、全世界に向けて「長崎平和宣言」がなされます。



平和公園のシンボルとしてそびえ立つ

【18:00~】交流会（長崎新聞文化ホール）

ピースボランティア、他の自治体の青少年と、立食パーティーで交流しました。



様々な自治体の青少年と交流

(2) 訪問2日目・8月9日(水)

- 9 : 5 0 式典前行事
1 0 : 3 5 長崎原爆犠牲者追悼平和祈念式典
(長崎原爆資料館)
1 2 : 0 0 古谷市長と面会
1 3 : 3 0 青少年ピースフォーラム意見交換会
(長崎ブリックホール)
1 5 : 4 0 原爆資料館見学



式典会場で古谷市長とともに記念写真

ながさきげんぱくぎせいしゃついでうへいわきねんしきてん 長崎原爆犠牲者追悼平和祈念式典

毎年8月9日に、被爆者^{ひばくしゃ}、政府・自治体関係者など、国内外から多くの人々が参列^{さんれつ}し、原爆死没者の冥福^{めいふく}と恒久の平和を願って行われます。

当日は朝から強い雨が降^ふっていましたが、式典開始時には雨も止み、晴れ間も出る天気となりました。

午前10時35分に開会し、被爆者^{ひばくしゃ}による合唱^{げん}、原爆死没者名簿^{ばくしほつしゃめいぼ}の奉安^{ほうあん}が行われました。名簿登載者数^{めいぼとうさいしやすう}



原爆死没者名簿が納められた

は、平成29年8月9日現在で、175,743名となりました。

72年前のこの日、原爆^{げんぱく}が投下された午11時2分、全員で黙^{もく}とうし、死没者^{しほつしゃ}への心からの哀悼^{あいとう}と不戦^{ちか}の誓いを新たにしました。

黙^{もく}とう後、田上富久^{たうえとみひさ}長崎市長から、世界に向けて市民の平和への願いを込めた

「長崎平和宣言^{ながさきへいわせんげん}」が発信された。田上市長は平和宣言^{たいえ せんげん}で、一言目に「ノーモア ヒバクシャ」と発し、国連での「核兵器禁止条約^{かくへいき}」の採択^{さいたく}を関連付け、日本政府をはじめ、世界中の全ての人々に向け、核兵器廃絶^{かくへいきはいぜつ}への強い思いを示しました。

田上市長による「平和宣言^{たいえ せんげん}」の後は、被爆者代表^{ひばくしゃ}深堀好敏氏^{ふかほりよしとし}による「平和への誓い^{ちか}」が読み上げられました。深堀氏は、自らの被爆体験^{ふかほり}に沿い、今後も被爆^{ひばく}の実相を後世に伝え、世界の恒久^{こうきゅう}平和や核兵器廃絶^{かくへいきはいぜつ}の実現に尽力^{じんりょく}することを誓いました。

訪問団は、初めて参列する式典の、厳粛^{げんしゆく}な中、これらの言葉をしっかりと受け止め、平和の重みを各々の心に深く刻^{きざ}んだようでした。

青少年ピースフォーラム意見交換会（長崎ブリックホール）

【13:30～】レクリエーション

事前に割り振られていた班の仲間たちとのアイスブレイクを目的に、テレパシーゲームと呼び名決めを行いました。



ゲームを通じて交流する参加者たち

【13:50～】話や写真から、色んな人の気持ちを考えよう

①長崎の被爆者の気持ちを考えよう ～小峰秀孝氏～

被爆者である小峰秀孝氏が4歳に被爆してからの生涯の中で苦労した事を例に、被爆者やその周囲の人間の気持ちを考え、想像力を発展させるプログラムを行いました。

②世界の子供たちの気持ちを知ろう ～シリアの子どもたち～

一見すると楽しくブランコで遊んでいるだけに見えるシリアの子供たちの写真を題材に、紛争によって避難先を転々としなければならぬ子供たちの背景まで読み取るプログラムを行いました。



班ごとにまとめた意見の数々

③一つの物事を多面的に見てみよう

普段の学校生活などにおける身近な出来事を題材に、多面的に見ることで色々な立場の人間から見た考え方を理解するプログラムを行いました。

【14:55～】二日間で学んだことを、今後に生かしてみよう ～モザイクアート作成～

青少年ピースフォーラム二日間の活動を通して、感じ、学んだことを踏まえ、今後の学校生活や日常生活にどう生かしていけるかを、参加者それぞれが人型の短冊に書き込み、モザイクアートを作成しました。



モザイクアートの前で集合写真

【15:15～】閉会式、修了証授与

長崎原爆資料館

この資料館では被爆の惨状をはじめ原爆が投下されるに至った経過、被爆から現在までの長崎の復興の様子、核兵器開発の歴史、そして核兵器のない平和希求までがストーリーを持たせ分かりやすく展示されています。

原爆直後と現在の長崎の風景写真を比較すると、目覚ましい勢いで復興した長崎の街と、長崎市民のたくましが伝わってきます。

今回の見学では、常駐している平和案内人の方に館内を案内してもらい、展示物の説明を受けました。



平和案内人による案内

(3) 訪問3日目・8月10日(木)

- 8:50 出島見学
- 10:00 大浦天主堂見学
- 10:45 グラバー園見学
- 15:40 長崎空港出発
- 17:15 羽田空港出発
- 19:00 秦野市役所到着、解散



三日間の行程を終え、たくましくなった様子で帰ってきた訪問団



2 訪問団員（参加者）の声

※一部抜粋

- 出発前は、長崎^{ながさき}ってどんな所なのだろうと少しドキドキしたり、きちんと「平和とは」という問いに対する答えが見つけれられるか不安でしたが、実際に訪問してみると、一緒^{いっしょ}に訪問した秦野市の仲間とも楽しい時間を過ごすことができました、全国の中学生とも仲良くなれて、すぐに緊張^{きんちょう}もほぐれていました。長崎^{ながさき}という場所は、私が好きな雰囲気^{ふんいき}で、街を歩いたり、路面電車に乗るだけで、とても楽しむことができました。食事^{しょくじ}も全て美味しくいただくことができました。

神奈川県に長く住んでいると、身近に戦争や平和を感じたり考えたりする機会がなかなか無く、「当たり前^{むづか}の日常が平和」だということは、頭でわかっているけど、実感することは難^{むづか}しいことが多かったです。しかし、実際「青少年ピースフォーラム」で当時の話を聞いたり、原爆資料館を見学したり、平和祈念式典に参加することで、戦争の悲惨さ^{ひさん}、沢山亡くなった方がいたこと、辛くて苦しい日々だったことが生々しく、真っ直ぐ心に届いてきて、当たり前^{とど}の日常が当たり前でなかったということを実感することができました。大切な人を突然失ってしまうことの悲しさは、きっと計り知れないものだろうと思います。もし私が大切な人と離^{はな}れたりしてしまったら、自分も死にたいと思うかも知れないと思いました。普通に過^{ふつう}ぎしている「今」はとても価値があるもので、二度と戻らないものだから、これからはもっともっと今を大切に生きようと思うことができた3日間でした。来年以降も毎年、平和祈念式典はテレビで見て、しっかり平和を考えて、機会があれば、また長崎^{ながさき}に訪^{おとず}れたいと思います。

- 出発前は不安だったけれど、最終的には、色々な地域^{ちいき}から参加した生徒たちと仲良くなれていて良かったです。今回の「中学生ながさき訪問団」で、原爆^{げんばく}のこと以外でも、戦争のことについて知りました。そして、意見交換会^{ごうかんかい}で、全国の青少年と交流して、普段の活動よりも視野の広い考え方を自分へ取り入れることができました。この考え方を活かし、今までの自分の考え方では解決できなかった課題を解決して解決して見せたいと思い、また、原爆^{げんばく}や戦争の悲惨さ^{ひさん}などを周囲の人たちに伝えて、もう二度と核兵器^{かくへいき}を作ること、作らせることもしてはならないということを世界にもっと広げて行けたら良いとも思いました。出発前は、「平和とは」という問いに対して「みんなが笑顔で仲良く」と答えていましたが、今

ではそれに加えて「学生は、しっかりと毎日学校へ行くことができ、社会人は、会社へ行くことができる。そして、犯罪が無く、みんなが安心して、明るく、心から笑うことができる」など、書ききれないほどの回答が出てきます。このように、多くのことを考えさせられる3日間でした。ありがとうございました。

先ほどの「原爆^{げんぱく}や戦争^{ひさん}の悲惨さを周囲の人たちに伝えて、世界に広げて行く」ということの第一歩として、「はだの平和の日のつどい」でしっかりと学んできたことを発表し、次に、学校へ伝える。そして、秦野がより良い市となり、神奈川がより良い県となり、連鎖^{れんさ}して広がっていけばよいと思います。そして、大人になっても、今回学んだことを忘れず^{わす}、思い出しては、伝えていく。そのようなことができれば良いと思います。

- 私にとって平和とは「平凡^{へいぼん}な生活を送ること」でした。そして今、私は平凡^{へいぼん}な生活を送ることができています。しかし、その生活に慣れてしまっていて、それを幸せだと感じるものが少なくなっていました。しかし、今回の訪問で、被爆^{ひばく}体験講話などの「青少年ピースフォーラム」に参加することによって、今の生活がどれほど幸せなことかを改めて気付くことができました。

「青少年ピースフォーラム」に参加したことについては、すごく良い経験ができたと思っています。実際に被爆^{ひばく}された方の話を聞いたり、被爆者^{ひばくしゃ}の方の人生を聞いて、みんなでその気持ちを考え、伝え合ったり、シリアの子どもたちの現状を知ったりと、とても貴重で有意義な時間となりました。交流会では、他県から来た青少年やピースボランティアの方々と沢山^{たくさん}話すことができ、楽しかったです。

平和祈念式典^{きねん}は、「一生に一度」とも言える、特別で記憶^{きおく}に残る経験になりました。

これらのことを、学校の全校生徒に伝え、戦争^{ひさん}の悲惨さ、生きることの大切さを知ってもらいたいです。

3日間、とても充実^{じゅうじつ}した、貴重な時間を送ることができました。

●出発前までは、授業などで学んで自分だけでも理解できていることを、ただ目にするだけだと思っていました。しかし、実際に訪問してみると、原爆^{げんばく}の中でも、ただ原爆^{げんばく}によって亡^なくなったのではなく、高熱^{ばくふう}の爆風^{ほうしゃのう}や放射能などによる死があり、さらにその中でも、すぐには亡^なくならず、もがき苦しんでいった人たちが何万人もいるのだと知り驚^{おどろ}きました。亡^なくなった人についても、ただ目をつむって横たわっているイメージを持っていたましたが、写真を見ると、口と目を大きく開いて今でも助けを求めているかのような顔をしていたり、何かを抱^だきかかえるように手を丸めたりと、様々な様子で、死の直前何をしたかったのか感じ取れる亡^なくなり方をしていました。

もし、この中学生ながさき訪問に参加していなかったら、戦争の現実を知らずに生きていたかと思うと、ぞっとするようになりました。もう少し、秦野でも、被爆者^{ひばくしゃ}と交流する又は被爆者^{また ひばくしゃ}の話を聞く機会があったら、現実を知り、次の世代へとつなげていくことができると思います。体験談の発表等の場合は、ただ話を聞くだけでなく、実際の写真があるとなお伝わりやすくなると思います。

●今回、とても貴重な経験ができる機会を設けていただき、ありがとうございました。この3日間は、とても実のある活動ばかりでした。私は、出発前、具体的に「平和とは何か」という問いについて考えても、「皆^{みな}が幸せであること」としか考えられませんでした。しかし、今は、自分が平和のために行動するべきことが見えてきました。例えば、「青少年ピースフォーラム」で深堀氏^{ふかぼり}による被爆体験^{ひばく}講話がありましたが、その中で、「今は毎日3食とって、健康でいられることなどが幸せ^{おっしや}」と仰^{おつしや}っていました。私たちが当たり前だと思っていることも、そうではないと気付いたので、全てのことに感謝して生活していきたいと思います。

また、私がこのフォーラム、交流会を通して気付いたことが三つあります。まず一つ目は、先ほども述べたとおり、当たり前のことに感謝して生活していくべきだということです。いつ何が起こるかは分かりません。だから、今ある生活を大切にしていきます。二つ目は、相手の意見^{みと}を認めることの重要性です。意見交換会^{こうかんかい}で、自分の意見ばかりで、相手の意見^{みと}を認めようとしないと、いつまで経っても話し合いが進まず、雰囲気^{ふんいき}が悪くなってしまう。雰囲気^{ふんいき}の悪化は、平和を維持^{いじ}する上でも良くないことなので、まずは、相手の意見^{みと}を認めながら活動

することを心掛^{こころが}けます。三つめは、交流の大切さです。私は、戦争はいじめが大きくなったものだと考えています。では、どうしていじめが起こるのだろうと考えると、相手を深く理解していないからではないかと考えます。なので、様々な形での交流を通し、相手を知ることが、いじめが起こらないための一歩ではないかと思います。交流の形は、意見交換^{こうかん}でも、レクリエーションでもいいと思います。交流の場を作り、相手を理解することが大切だと思います。

以上のことから、私は、今回の訪問で学んだことをしっかりと学校に持ち帰り、広げて行きたいと思います。この3日間は、本当に充^{じゅうじつ}実^{じつ}していて楽しかったです。一人ひとりができることは小さくとも、皆^{みな}で行動すれば、実行することができます。これをきっかけに、もっと友達を増やし、自分の視野^{しや}を広げていきたいと思っています。一緒に活動^{いっしょ}した仲間も、皆^{みな}優しく、平和^{しんけん}について真剣に考えることができたので、とても良かったです。

3 団員名簿

No.	氏名	所属	学年
1	おかだ ゆきのり 岡田 幸憲	本町中学校	2
2	おおかわ わかさ 大川 若紗	南中学校	3
3	かしわぎ ゆずか 柏木 柚花	東中学校	2
4	おかだ うめか 岡田 梅佳	北中学校	3
5	おしの ふみや 押野 文哉	大根中学校	3
6	うえず ありさ 上江洲 有紗	西中学校	3
7	やまもと かずき 山本 和輝	南が丘中学校	3
8	やまぐち まなか 山口 愛花	渋沢中学校	3
9	なかむら ひより 中村 日陽	鶴巻中学校	3

Ⅲ はだの平和の日のつどい

訪問を終え、秦野の地へ帰った両訪問団は、8月12日(土)に秦野市文化会館小ホールにて「平和の日事業」
として開催された「はだの平和の日のつどい」で、古谷^{かいさい}
義幸^{よしゆき}秦野市長及び石井^{いしいのぼる} 昇^{ふるや} ピースキャンドルナイト実

行委員会実行委員長が見守るなか、来場した100名もの観客に訪問の活動報告を行いました。ゲストスピーカーである古谷市長及び石井実行委員長と生の声で平和についての意見交換を行う「平和を考えるパネルディスカッション」を行いました。

彼らの肌を通して感じ、学んできたことを語った生の声は、会場の市民の心にも深く刻まれました。



【15:30～】開 会

古谷市長、石井実行委員長の挨拶により開
会しました。



【15:35～】親子ひろしま訪問団活動報告

訪問時の写真を使ったスライドに合わせ、
子どもたち5名が分担して報告しました。



【15:50～】中学生ながさき訪問団活動報告

9名を三つのグループに分け、グループごと
に発表。タブレット端末を操作しながら、団員
が自分たちで写真や動画を組み合わせて作った
スライドを活用して報告しました。



【16:05～】平和を考えるパネルディスカッション

古谷市長、石井実行委員長をゲストスピー
カーとし、中学生ながさき訪問団に随同行した
教育指導課の米澤指導主事がコーディネー
ターを務め、訪問団が被爆地で感じ、学んでき
たことや、平和に対する思いを、台本のない生の声で話しました。



Ⅳ 資 料

1 秦野市の市民憲章・平和都市宣言・平和の日制定文

◎秦野市民憲章

わたくしたち秦野市民は、丹沢の美しい自然のもとで、このまちの限らない発展に願いをこめ、ここに市民憲章を定めます。

- 1 平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。
- 1 きれいな水とすがすがしい空気、それは私たちのいのちです。
- 1 健康ではたらき若さあふれるまち、それは私たちのねがいです。
- 1 市民のための豊かな文化、それは私たちののぞみです。
- 1 みんなの発言で住みよいまちを、それは私たちのちかいです。

この市民憲章は、秦野市の発展を願って昭和44年10月1日に制定したものです。

◎秦野市平和都市宣言

私たち秦野市民は、平和への限らない願いをこめて「平和を愛する市民のまち、それは私たちの誇りです。」と市民憲章に定めた。

私たちの責務は、この精神にのっとり永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り次代へ引き継いでいくことである。

しかし、武力紛争は世界各地で絶え間なく続き、際限のない軍備拡大と核兵器の増強は、人類の生存に深刻な脅威を与えている。

世界の恒久平和は、すべての人々の切なる願いである。私たち秦野市民は、国際平和年に当たり非核三原則を堅持するとともに、永久の平和とあらゆる国のあらゆる核兵器の廃絶を願い、ここに「平和都市」を宣言する。

昭和61年3月27日制定

◎秦野市平和の日制定について

私たち秦野市民は、永遠の平和を希求し、愛する郷土を守り引き継いでいく精神をうたった秦野市民憲章と秦野市平和都市宣言の理念の下に、一人ひとりがそれぞれの信条や立場を越えて、平和についてともに考え、語り合うことにより、平和への願いを未来に向け継承していくため、ここに「秦野市平和の日」を制定します。

秦野市平和の日 毎年8月15日

平成20年6月9日制定

2 広島市平和宣言

皆さん、72年前の今日、8月6日8時15分、広島^{ひろしま}の空に「絶対悪」が放たれ、立ち昇ったきのこ雲の下で何が起こったかを思い浮かべてみませんか。鋭い閃光がピカーッと走り、凄まじい放射線と熱線。ドーンという地響きと爆風。真っ暗闇の後に現れた景色のそこかしこには、男女の区別もつかないほど黒く焼け焦げて散らばる多数の屍^{しかばね}。その間をぬって、髪は縮れ真っ黒い顔をした人々が、焼けただけ裸^{はだか}同然で剥がれた皮膚を垂らし、燃え広がる炎^{ほのお}の中を水を求めてさまよう。目の前の川は死体で覆われ、河原は火傷した半裸の人で足の踏み場もない。正に地獄です。「絶対悪」である原子爆弾は、きのこ雲の下で罪のない多くの人々に惨たらしい死をもたらしただけでなく、放射線障害や健康不安など心身に深い傷を残し、社会的な差別や偏見を生じさせ、辛うじて生き延びた人々の人生をも大きく歪めてしまいました。

このような地獄は、決して過去のものではありません。核兵器が存在し、その使用を仄めかす為政者がいる限り、いつ何時、遭遇するかもしれないものであり、惨たらしい目に遭^ああうのは、あなたかもしれません。

それ故、皆さんには是非とも、被爆者の声を聞いてもらいたいと思います。15歳だった被爆者は、「地獄図の中で亡くなっていった知人、友人のことを偲^{しの}ぶと、今でも耐えられない気持ちになります。」と言います。そして、「一人一人が生かされていることの有難さを感じ、慈愛の心、尊敬の念を抱いて周りに接していくことが世界平和実現への一步ではないでしょうか。」と私たちに問いかけます。

また、17歳だった被爆者は、「地球が破滅しないよう、核保有国の指導者たちは、核抑止という概念にとらわれず、一刻も早く原水爆を廃絶し、後世の人たちにかげがえのない地球を残すよう誠心誠意努力してほしい。」と語っています。

皆さん、このような被爆者の体験に根差した「良心」への問い掛けと為政者に対する「誠実」な対応への要請を我々のものとし、世界の人々に広げ、そして次の世代に受け渡していこうではありませんか。

為政者の皆さんには、特に、互いに相違点を認め合い、その相違点を克服するための努力を「誠実」に行っていただきたい。また、そのためには、核兵器の非人道性についての認識を深めた上で、自国のことのみに専念して他国を無視することなく、共に生きるための世界をつくる責務があるということを自覚しておくことが重要です。

市民社会は、既に核兵器というものが自国の安全保障にとって何の役にも立たないということを知り尽くし、核を管理することの危うさに気付いてもいます。核兵器の使用は、一発の威力が72年前の数千倍にもなった今、敵対国のみならず自国をも含む全世界の人々を地獄へと突き落とす行為であり、人類として決して許されない行為です。その

ような核兵器^{かくへいき}を保有することは、人類全体に危険^{きけん}を及ぼすための巨額^{きやがく}な費用投入にすぎないと言って差し支えありません。

今や世界中からの訪問者が年間170万人を超える平和記念公園ですが、これからもできるだけ多くの人々が訪^{おとず}れ、被爆^{ひばく}の実相を見て、被爆者^{ひばくしゃ}の証言^きを聴いていただきたい。そして、きのこ雲の下で何が起こったかを知り、被爆者^{ひばくしゃ}の核兵器廃絶^{かくへいきはいぜつ}への願いを受け止めた上で、世界中に「共感」の輪を広げていただきたい。特に、若い人たちには、広島^{わか}を訪^{おとず}れ、非核大使として友情の輪を広げていただきたい。広島は、世界の人々がそのための交流をし、行動を始める場であり続けます。

その広島が会長都市となって世界の7,400を超える都市で構成する平和首長会議は、市民社会において世界中の為政者^{いせいしゃ}が、核兵器廃絶^{かくへいきはいぜつ}に向け、「良心」に基づき国家^{わく}の枠^こを超えた「誠実」な対応を行えるような環境^{かんきやう}づくりを後押ししていきます。

今年7月、国連では、核保有国^{かく}や核の傘^{かさ}の下にある国々を除く122か国の賛同を得て、核兵器禁止条約^{かくへいき}を採択^{さいたく}し、核兵器廃絶^{かくへいきはいぜつ}に向かう明確な決意が示されました。こうした中、各国政府は、「核兵器のない世界」に向けた取組を更に前進させなければなりません。

特に、日本政府には、「日本国民は、国家^{めいよ}の名誉^{すうこう}にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う。」と明記している日本国憲法^{けんぽう}が掲げる平和主義^{かか}を体現するためにも、核兵器禁止条約^{かくへいき}の締結促進^{ていけつそくしん}を目指して核保有国^{かく}と非核保有国^{ひかく}との橋渡し^{はしわた}に本気で取り組んでいただきたい。また、平均年齢^{ねんれい}が81歳を超えた被爆者^こをはじめ、放射線^{ひばくしゃ}の影響^{ほう}により心身に苦しみを抱える多くの人々に寄り添い、その支援策^{しえんさく}を一層充^{いっそう}実^{じゅうじつ}するとともに、「黒い雨降雨地域」を拡大^{あめこうう}するよう強く求めます。

私たちは、原爆犠牲者^{げんばくぎせいしゃ}の御霊^{みたま}に心からの哀悼^{あいとう}の誠^{まこと}を捧げ、世界の人々と共に、「絶対悪^{ささ}」である核兵器^{かくへいき}の廃絶^{はいぜつ}と世界恒久^{こうきゅう}平和の実現に向けて力を尽くすことを誓います。

平成 29 年（2016 年） 8 月 6 日

広島市長 松井 一實

3 (広島) こども代表「平和への^{ちか}誓い」

原子^{ばくたん}爆弾が投下される前の広島には、

美しい自然がありました。

大好きな人の^{やさ}優しい笑顔、温もりがありました。

一^{いっしょ}緒に^{つく}創るはずだった未来がありました。

広島には、当たり前前の日常があったのです。

昭和20年（1945年）8月6日 午前8時15分、

広島^の街は、焼け野原となりました。

広島^の街を失ったのです。

多くの命、多くの夢を失ったのです。

当時小学生だった語り部の方は、

「亡^なくなった母と姉を見ても、涙^{なみだ}が出なかった」と語ります。

感情までも^{うば}奪われた人がいたのです。

大切なものを^{うば}奪われ、心の中に深い傷^{きず}を負った広島の人々。

しかし、今、広島は人々の笑顔が自然にあふれる街になりました。

草や木であふれ、緑いっぱい^の街になりました。

平和都市として、世界中の人に^の関心をもたれる街となりました。

あのまま、人々があきらめてしまっていたら、

復興への強い思いや願^すいを捨てていたら、

苦しい中、必死で生きてきた人々がいなければ、

今の広島はありません。

平和を考える場所、広島。

平和を^{ちか}誓う場所、広島。

未来を考えるスタートの場所、広島。

未来の人に、戦争の体験は不要です。

しかし、戦争の事実を正しく学ぶことは必要です。

一人一人の命の重みを知ること、互^{たが}いを^{みと}認め合うこと、

まっすぐ、世界の人々に^{とど}届く言葉で、
あきらめず、粘り^{ねば}強く伝えていきます。
広島の子どもの私たちが勇気を出し、心と心をつなぐ^か架^{はし}け橋を築いていきます。

平成29年(2017年)8月6日

こども代表	広島市立大芝小学校	6年	^{たけます} 竹舛	^{なおなり} 直柔
	広島市立中筋小学校	6年	^{ふくなが} 福永	^{のぞみ} 希実

4 ^{ながさき} ^{せんげん} 長崎平和宣言

「ノーモア ヒバクシャ」

この言葉は、未来に向けて、世界中の誰も、永久に、核兵器による惨禍を体験することがないように、という被爆者の心からの願いを表したものです。その願いが、この夏、世界の多くの国々を動かし、一つの条約を生み出しました。

核兵器を、使うことはもちろん、持つことも、配備することも禁止した「核兵器禁止条約」が、国連加盟国の6割を超える122か国の賛成で採択されたのです。それは、被爆者が長年積み重ねてきた努力がようやく形になった瞬間でした。

私たちは「ヒバクシャ」の苦しみや努力にも言及したこの条約を「ヒロシマ・ナガサキ条約」と呼びたいと思います。そして、核兵器禁止条約を推進する国々や国連、NGOなどの、人道に反するものを世界からなくそうとする強い意志と勇気ある行動に深く感謝します。

しかし、これはゴールではありません。今も世界には、15,000発近くの核兵器があります。核兵器を巡る国際情勢は緊張感を増しており、遠くない未来に核兵器が使われるのではないかと、という強い不安が広がっています。しかも、核兵器を持つ国々は、この条約に反対しており、私たちが目指す「核兵器のない世界」にたどり着く道筋はまだ見えていません。ようやく生まれたこの条約をいかに活かし、歩みを進めることができるかが、今、人類に問われています。

核兵器を持つ国々と核の傘の下にいる国々に訴えます。安全保障上、核兵器が必要だと言い続ける限り、核の脅威はなくなりません。核兵器によって国を守ろうとする政策を見直してください。核不拡散条約(NPT)は、すべての加盟国に核軍縮の義務を課しているはずです。その義務を果たしてください。世界が勇気ある決断を待っています。

日本政府に訴えます。核兵器のない世界を目指してリーダーシップをとり、核兵器を持つ国々と持たない国々の橋渡し役を務めると明言しているにも関わらず、核兵器禁止条約の交渉会議にさえ参加しない姿勢を、被爆地は到底理解できません。唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への一日も早い参加を目指し、核の傘に依存する政策の見直しを進めてください。日本の参加を国際社会は待っています。

また、二度と戦争をしてはならないと固く決意した日本国憲法の平和の理念と非核三原則の厳守を世界に発信し、核兵器のない世界に向けて前進する具体的方策の一つとして、今こそ「北東アジア非核兵器地帯」構想の検討を求めます。

私たちは決して忘れません。1945年8月9日午前11時2分、今、私たちがいるこの丘の上空で原子爆弾がさく裂し、15万人もの人々が死傷した事実を。

あの日、原爆の凄まじい熱線と爆風によって、長崎の街は一面の焼野原となりました。

皮膚が垂れ下がりながらも、家族を探し、さ迷い歩く人々。黒焦げの子どもの傍らで、茫然と立ちすくむ母親。街のあちこちに地獄のような光景がありました。十分な治療も受けられずに、多くの人々が死んでいきました。そして72年経った今でも、放射線の障害が被爆者の体をむしばみ続けています。原爆は、いつも側にいた大切な家族や友だちの命を無差別に奪い去っただけでなく、生き残った人たちのその後の人生をも無惨に狂わせたのです。

世界各国のリーダーの皆さん。被爆地を訪れてください。遠い原子雲の上からの視点ではなく、原子雲の下で何が起きたのか、原爆が人間の尊厳をどれほど残酷に踏みにじったのか、あなたの目で見て、耳で聴いて、心で感じてください。もし自分の家族がそこにいたら、と考えてみてください。

人はあまりにもつらく苦しい体験をしたとき、その記憶を封印し、語ろうとはしません。語るためには思い出さなければならないからです。それでも被爆者が、心と体の痛みに耐えながら体験を語ってくれるのは、人類の一員として、私たちの未来を守るために、懸命に伝えようと決意しているからです。

世界中のすべての人に呼びかけます。最も怖いのは無関心なこと、そして忘れていくことです。戦争体験者や被爆者からの平和のバトンを途切れさせることなく未来へつないでいきましょう。

今、長崎では平和首長会議の総会が開かれています。世界の7,400の都市が参加するこのネットワークには、戦争や内戦などつらい記憶を持つまちの代表も大勢参加しています。被爆者が私たちに示してくれたように、小さなまちの平和を願う思いも、力を合わせれば、そしてあきらめなければ、世界を動かす力になることを、ここ長崎から、平和首長会議の仲間たちとともに世界に発信します。そして、被爆者が声をからして訴え続けてきた「長崎を最後の被爆地に」という言葉が、人類共通の願いであり、意志であることを示します。

被爆者の平均年齢は81歳を超えました。「被爆者がいる時代」の終わりが近づいています。日本政府には、被爆者のさらなる援護の充実と、被爆体験者の救済を求めます。

福島原発事故から6年が経ちました。長崎は放射能の脅威を経験したまちとして、福島の被災者に寄り添い、応援します。

原子爆弾で亡くなられた方々に心から追悼の意を捧げ、私たち長崎市民は、核兵器のない世界を願う世界の人々と連携して、核兵器廃絶と恒久平和の実現に力を尽くし続けることをここに宣言します。

2017年（平成29年）8月9日

長崎市長 田上 富久

5 (長崎) 被爆者代表「平和への誓い」

原爆が投下された1945年8月9日、私は16歳。爆心地から3.6キロ離れた長崎県疎開事務所に学徒動員されていました。11時2分、白い閃光と爆発音を感じ慌てて机の下にもぐり込みました。夕方、帰宅命令が出て、私は学友と2人金比羅山を越えて帰ろうと山の中腹まできたところ、山上から逃げてくる多くのけが人に「山の向こうは一面火の海だから……」と制止され、翌朝、電車の線路に沿って歩き始めました。長崎駅の駅舎は焼け落ち、見慣れた町並みは消えてなくなり、別世界に迷い込んだようでした。ようやく辿りついた山王神社近くの親戚の家は倒壊していました。その中で家の梁を右腕に抱きかかえるような姿で18歳の姉は息絶えていました。あの時、私も悔やまれてなりません。そのあと大学病院へ向かい、さらに丘を越えると眼下に浦上天主堂が炎上していました。涙があふれ出るとともに怒りを覚え、「ああ、世界が終わる」と思いました。ここ平和公園の横を流れる川には折り重なって死体が浮いていました。私は、三ツ山に疎開していた両親に姉の死を報告し、8月12日、母と弟と3人で材木を井桁に組み、姉の遺体を茶毘に付しました。その日は晴天でした。頭上から真夏の太陽が照りつけ、顔の正面からは熱気と臭気がせまり目がくらみそうでした。母は少し離れた場所で地面を見つめたまま、ただ祈り続けていました。

たった一発の原子爆弾は7万4000人の尊い命を奪い、7万5000人を傷つけました。あの日、爆心地周辺から運よく逃げ延びた人々の中には、助かった喜びも束(つか)の間、得体のしれない病魔に侵され多くが帰らぬ人となりました。なんと恐ろしいことでしょう。私は「核は人類と共存できない」と確信しています。2011年3月、福島第1原子力発電所の事故が発生し国内の原発は一斉に停止され、核の脅威に怯えしました。しかし、リスクの巨大さに喘いでいる最中、こともあろうに次々と原発が再稼働しています。地震多発国のわが国にあって如何なる厳しい規制基準も「地震の前には無力」です。原発偏重のエネルギー政策はもっと自然エネルギーに軸足を移すべきではないでしょうか。戦後「平和憲法」を国是として復興したわが国が、アジアの国々をはじめ世界各国から集めた尊敬と信頼は決して失ってはなりません。また、唯一の戦争被爆国として果たすべき責務も忘れてはなりません。

私は1979年、原爆で生き残った有志6人で原爆写真の収集を始め、これまでに様々な人たちが撮影した4000枚を超える写真を収集・検証してまいりました。原子雲の下で起きた真実を伝える写真の力を信じ、これからも被爆の実相を伝え、世界の恒久平和と核廃絶のために微力をつくすことを亡くなられた御霊の前に誓います。

2017年(平成29年)8月9日

被爆者代表 深堀 好敏

平成29年度
親子ひろしま訪問団・中学生ながさき訪問団
訪問の記録

編集発行 秦野市市民部市民活動支援課
〒257-8501 秦野市桜町1-3-2
TEL 0463-82-5118

